



からだ ^ひが冷えると、おなかが ^{いた}痛くなるのはなぜ

からだ ^ひが冷えると、内臓の ^{おんど}温度も ^さ下がるため

からだ ^ひが冷えると、食べた物の ^{えいよう}栄養を ^{しょうか}消化したり、^{きゅうしゅう}吸収したりする、^い胃や ^{じゅうにしちょう}十二指腸、^{しょうちよう}小腸などの、^{からだ}体の中の ^{ないぞう}内臓の ^{おんど}温度も ^さ下がってしまいます。
^い胃や ^{じゅうにしちょう}十二指腸、^{しょうちよう}小腸からは、^た食べた物の ^{えいよう}栄養を ^{しょうか}消化したり、^{きゅうしゅう}吸収したりするための、^{しょうかえき}消化液や ^{しょうかこうそ}消化酵素が ^で出ています。

^{おんど}温度が ^さ下がると、そのは ^{たらき}たらきが ^{にぶ}にぶったり、^{しょうか}消化器官の ^{うご}動きを ^{ちようせつ}調節する、^{しんけい}神経や ^{きんにく}筋肉も ^{はたらき}はたらきが ^{よわ}弱ってしまい、^{せいじよう}正常のは ^{たらき}たらきを ^{しな}しなくなってしまう。

そのため、^{からだ}体が ^ひ冷えると、^{おなか}おなかが ^{いた}痛くなったりするのです。

おなかが ^{いた}痛いとき、^{あたた}温めるのは

おなかが ^{いた}痛いとき、^{おも}思わず ^ておなかに ^{あたた}手を ^{あて}あてて、^{あたた}温めていることがあります。

たしかに、^{うえ}上のように、^{からだ}体が ^ひ冷えたことが ^{げんいん}原因で、^{いた}おなかが ^{あたた}痛くなったときには、^{あたた}温めると、^{いた}痛みを ^{おさ}おさえることができます。

しかし、^{いた}おなかが ^{いた}痛くなるのには、^{げんいん}いろいろな ^{あたた}原因があり、^{あたた}温めてよいのは、^{からだ}体が ^ひ冷えて、^{いた}おなかが ^{いた}痛くなったときだけです。

^{びょうき}病気など、^{げんいん}ほかの ^{いた}原因で ^{いた}おなかが ^{いた}痛くなった場合、^{あたた}温めてはいけないこともありますので、^{ちゅうい}注意が ^{ひつよう}必要です。（監修・保志 宏）

